ことばによるコミュニケーションを育てていこうとした実践

落ち着いて、友だちといっしょに生活する子をめざして

田　中　信　子

はじめに

本児は、３年生になった時Ｔ聾学校から転入してきた４年生である。聾学校での２年間で、ある程度のひらがなの読み書き、数を数える等はできていたが、身辺自立や集団参加の面においては、落ち着いて行事することができなかった。

本児は人なつこいが、自分勝手なところがあって友だちと仲良く遊ぶことができなかった。先生や友だちと関わりたいという気持ちは持っているが、言葉で自分の気持ちをうまく表わせない為、直接手出しをすることが多い。また、こだわりが強い為人の言うことに素直に従うことができない子であった。

本児の人と関わりたいという気持ちを大切にし、落ち着いて行動することと言葉で気持ちがコントロールできるような自制心の芽ばえを培っていこうとした本年度の実践について述べてみたい。

１．プロフィール

(1) 生　育　歴

・昭和58年11月７日生　10歳　小学部４年生　男子　聴覚障害

・正常出産　体重1,960ｇ　歩行18か月　２年４か月の家庭保育の後、心身障害児通園施設に８か月通園。Ｔ聾学校幼稚部３年。Ｔ聾学校小学部２年を過ごす。

・３歳児検診で言葉の発達が遅いというので聴力の精密検査を受ける。４歳で脳波聴検異常と診断される。５歳の時発語があった。

・９歳で本校小学部３年生に転入し、今日に至る。

・家族は母親と２人暮らしで、母親は本児の教育に熱心で協力的である。

(2) 諸検査による実態

・右図のように遠城寺式発達検査（平成５年４月実施）では３歳から４歳の発達を示している。移動運動、対人関係、発語に遅れが見られる。

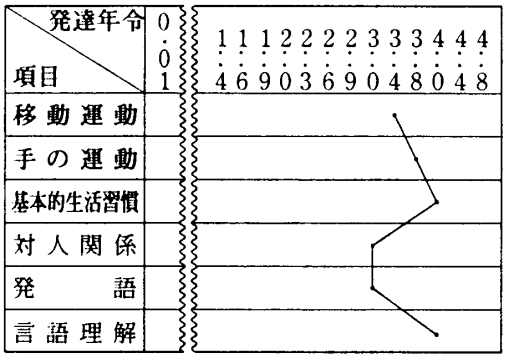
(3) コミュニケーションに関する実態

・一語文や二語文で話すことが多い。

・限られた場面で限られた言葉を使う。

・語彙は徐々に増えているが多くはない。「～を下さい。」等の欲求語が多い。

・言葉の誤学習や言葉の混同が見られる。例スカートウ（スカート）これい（これ）～させたい（～したい）これでから（「これから」と「これで」



遠城寺式乳幼児発達検査

の混同）

・言語表出には遅れが見られるが、言語理解能力は高い。

(4) 行動特性

・水遊び、工作、ブロック遊び等自分の好きな活動では集中できるが、興味のない活動ではすぐにトイレ等に逃げ出そうとする。

・こだわりが強く、自分のしたいことを頑固に通そうとし、思いが通じないと、相手に手出しをすることが多い。

・情緒が不安定である。食べ物に対する執着が強い。

2．取り組みの構想

個人目標　落ち着いて、友だちといっしょに生活する子

↓

つけたい力　・基本的生活習慣の確立　・集中する力　・模倣する力
・勝手なことをしないで指示を聞いて行動する力（自制心）

↓

コミュニケーションに視点をあてた取り組み

仮説　本児は伝達の意図や意欲はあるが、伝達方法が未熟で自分の思いを人にわかるように伝えることができない。そこで、①相手をする身近な大人が、本児の意図を読み取り、やりとりできたという自信や喜びを持たせながら、さらにコミュニケーションの意欲を高めていく。また、②生活経験を豊かにすることによって、使える語彙を増やしたり、本読みや日記等の指導により、正しい表現方法を身につけさせたりしてコミュニケーションの機能を高めていく。③友だちとの関わりを大切にし、生活の中から生まれてくる本児の言葉を大切にしながら、正しい表現を繰り返し指導することによって、少しずつ自分の思いが人に伝わる喜びを感じさせる。以上のようなコミュニケーションの力を高めていくことによって、落ち着いて、友だちといっしょに生活が送れることに近づいてくるものと考える。

↓

めざすコミュニケーション像　自分の思いを人にわかるように話す子

↓

つけたい力　・自分の気持ちを表現する力
・話す人を見て、静かに話を聞こうとする態度
・大きな声を出して正しく発音する力

↓

指導方針	・好きな活動から取り組み、共感関係を育てていく。 ・日常生活の中で、自分の思いや要求を言葉で話をさせるようにする。 ・話しやすい雰囲気や集中できる場を保障していく。 ・繰り返しの指導や繰り返しの取り組みを大切にしていく。

（実践）

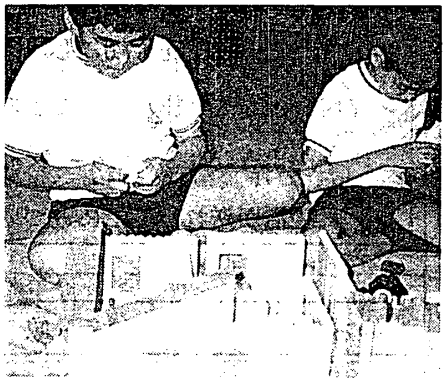
生活単元学習	日常生活	遊びの時間
・生活経験の広がりをねらう。 （クラス） 友だちとの関わりを大切にし、自分の思いが出し合える場とする。 （合同） 落ち着いて、皆と一緒に行動する場とする。	・パターン化した活動の中で自信を持たせる。 （自由遊び） 先生や友だちとリラックスした中で、心を通わせコミュニケーションする喜びや楽しさを体得させる場とする。	・思いきり遊ばせる。 好きな遊びを友だちや先生とする中で、遊びの楽しさを味わわせ、自分の思いが表現できる場とする。 集中できる遊びやルールに従ったり我慢したりする場ともする。

家族との連携	・生活ノートで学校と家庭での様子を知らせ合う。 ・家庭学習（プリント・本読み・日記）を通して、できることを増やし自信をもたせていく。

３．指導の実際

好きな活動から取り組み、共感関係を育てていった実践例

① 自由遊びの中で



ブロックで遊んでいるＭ男

４月の遊びの時間にプレールームにままごとやお人形やブロック等の色々な遊び道具を置いて、好きな遊びをさせた。本児は、友だちの持っているものに次々と興味を移し、壊したり取り上げたりした。集中して遊ぶことができなかった本児に、学級での自由遊びの時に先生と一緒にブロック遊びを繰り返した。本児も回を重ねる内にだんだんと面白くなってきて、６月には集中して取り組むようになってきた。しかし、始めの内は、自分のしたいようにするので、友だちとのトラブルもあって仲良く遊べなかった。それでも、先生とブロック遊びを何度かする内に少しずつ友だちとも遊べるようになってきた。

その様子は上の写真と次の表のようである。

本　　児	先　生　や　友　だ　ち
・おふろ、おふろ、おふろ。	先生：おふろが作りたいのね。どこにするの。
・ここ、ここ。	先生：そう。いいなあ。ここに作ろう。
・（トイレを作る。）	先生：トイレも作ったの。犬小屋も作ろうよ。
・（うなずく）犬小屋を作る。	先生：できた。できた。こんどは、Mちゃん何を作るの。
・これい。（車をさしながら）	S男：車はぼくのだ。
	先生：Sちゃんにも借してあげよう。
・うん。（車を借しながら）	S男：車庫も作ってよ。
・車庫、車庫。	先生：一緒にSちゃんの車庫を作ろう。
・うん、作ろう。	
	（以下略）

繰り返しの指導で意欲的に取り組んでいった実践例

① 朝の会の活動

本児は1学期からずっと木曜日が日直である。本児は朝の会の司会をすることが好きで、喜んでしている。しかし「きのうのこと」の発表では、はじめは自信がなく小さい声で人に分かるような発表にならなかった。2学期になって少し慣れてきて、友だちの質問にも答えれるようになってきた。11月11日の様子を右の写真や下の表に示す。

「きのうのこと」の発表をしているM男

本　　児	先生や友だち
・きのうは、サラダを作りました。	O男：何を入れましたか。
・きゅうりやソーセージ。	先生：誰と作りましたか。
・おかあさんと作りました。	O男：おいしかったですか。
・おいしかったです。	先生：よくわかりました。

② 生活単元学習「たなばた発表会」――劇活動――

本校小学部では、6月中旬から7月上旬にかけて「たなば発表会」という単元を組んでいる。「とんでけとんでけわがままなむし」の劇をすることにした。同じパターンでストーリーが展開するところや歌や踊りが面白く児童の実態に合って楽しんで取り組めるものと考えた。本児が一人で言う台詞は2つだった。発表会当日は、劇の中で花に水をかける町の人の役「はい、わたしは水をかけています。」の台詞は大きな声で言えた。『当日は練習の成果が見られとても良かったです。「七夕発表会の劇やゲーム頑張ったね」と言うとうれしそうでした。積み重ねが大切ですね。今年は、とても良くできたとうれしく思いました』と母親は次の日の生活ノートに記し、担任に伝えた。

花に水をかけているM男

言葉で気持ちをコントロールしていった実践例

① 給食指導

おかわりを頼んでいるM男

本児の一番の楽しみは給食の時間である。配膳されたものを全部食べたらおかわりできると学級の友だちと約束している。本児はおかわりがしたいので、嫌いなものでもなんとか食べれるようになってきた。本児の食べたいという気持ちをきちんと相手に伝えさせたいという教師の願いから意図的に「～のおかわりを下さい。」と言ってからおかわりの許可をすることにした。おかわりをするものがない時は、「～をあげましょうね。」と自分で言って友だちのをほしがったが、「またね。」という言葉で納得してやめることができるようになってきた。自分で「大きくなったら」とか「おうちで作りましょう」とか言って自制をしている。

② 砂場での遊び

砂場で遊んでいるM男

右図は、昼休憩に砂場で遊んだ時の会話である。この後、しばらくして砂山にホースをうめて水を出す真似をして遊んだ。ホースの先を持って「おみず、おみず。」と見たてつもり活動をしていた。そこへ、水遊びの好きなN男もやってきて一緒になって「ジャー、ジャー」と言いながら遊んだ。先生が「砂で水道を作ったの」と聞くと「おみず、おみず。」と言ってにこにこしていた。十分に遊んだので「5校時の学習をするので教室に入りまょう。」と言うとさっと遊びを止めて教室に入って来ることができた。

本　児	先　生
(水道をさわっている。) ←	Mちゃん。今日はお水はやめようよ。
(まだつついている。) ←	お水はだめよ！
おみずはいけません。 ←	水遊びはまたね。
(と自分で言って水を止める。)	
(以下略)	

4．考察及び今後の課題

指導者が、よき話し手、よき聞き手となるよう努め、友だちと関わる機会を多く与えたことによって、本児も自分の欲求や思いを言葉で表わすことが多くなった。その結果、我慢する力もつき始め、少しずつ落ち着いた行動が見られるようになり、友だちと関わる楽しさがわかってきつつある。友だちと仲良く遊んだり学習したりできるようになったことは今年度の取り組みの成果であると思う。

今後は、経験を広げ、充実させていくことで、できることを増やしコミュニケーションする楽しさをさらに味わわせていきたい。本児にとって楽しい活動を工夫し、もっともっと個別プログロムの充実を図っていきたい。又、今年度十分でなかった家庭や医療との連携を密にして、社会的自立へ向けての個に合った指導に取り組んでいきたい。